

# 象徴的収斂理論の考察

——政治漫画との関連において——

茨木 正治

## 第一章 問題の所在

## 第二章 象徴的収斂理論と政治漫画

### (1) 象徴的収斂理論とファンタジー・テーマ分析

#### 1 象徴的収斂理論(Symbolic Convergence Theory)

#### 2 象徴的収斂理論の構造

### (2) 象徴的収斂理論と政治漫画 —— 説得機能と象徴的収斂理論のレトリック ——

### (3) 政治漫画と象徴的収斂理論 —— 研究例考察 ——

#### 1 選挙運動期間の政治漫画分析

#### 2 「大統領の醜聞」における政治漫画分析

## 第三章 結論と課題

## 第一章 問題の所在

象徴<sup>①</sup>を考えるときに常に生ずる問題がある。それは、象徴がいわゆる「表わすもの」と「表わされるもの」との関係において成り立つ概念であることから派生するものである。すなわちこうした関係をどのように実証するかという問題である。この問題がなぜ象徴研究を悩ますかといえ、象徴それ自体に内在する問題からである。言葉为例に取れば、個々の言葉の指示対象のみならず、それに想起されるイメージは個々人の経験に基づいており、その領域は他者のそれと全く同一であるとは限らない。他方、言葉を使つて我々はコミュニケーションが可能になる。それは、言葉が意味を共有しているからである。このように、象徴は、「個別性」と「普遍性（一般性）」を同時に持つ。この「個別」と「普遍」をどのように接合するかが象徴を考える際に常に付きまとうのである。「それはあなたの解釈だ。ほかの人はそう思わない」「面白い指摘だが、一般化できるのかね」等々。

もちろん象徴研究者はこうした悩みを克服すべく様々な方策を考え出してきた。テクストのシンボリズムをコンテクストの事実性を厳密にして、そこから関係の論理性を導き出そうとしたのもその一つである。記号論、レトリック研究、歴史学の史料に忠実な「史料実証主義」ともよべるアプローチもその範疇に入るといえよう。<sup>②</sup>

しかし、特に政治における象徴研究にはそのいずれも決定的ではない。大嶽秀夫は、政治世界の象徴とそれが表現する世界観・イデオロギー・政治的価値体系を分析対象とすることの「自縄自縛」性を語っている。すなわち彼によれば、権威主義的国家の象徴さを暴き、神話破壊に象徴研究は大きく貢献したが、自由主義（民主主義）国家においては、研究者自身の価値観をも象徴が相対化してしまい、象徴によるイデオロギー分析も研究者の手段を目的より重視する「プロ意識」と相俟って、理念へのシニシズム、価値へのニヒリズムを招くとしている（大嶽、鴨、曾根、一九九六、二八―二九頁）。このような象徴研究への隘路をどのように打開したらよいであろうか。

本論文では象徴的収斂理論 (Symbolic Convergence Theory) を検討することによって、この隘路を開く手掛かりを求めようとするものである。後に詳述するように、この理論は、象徴の凝集機能および象徴による意識の共有・統合に着目し、「ファンタジー」 (fantasy) という事実描写に対する現象をもとにして、「ファンタジー・テーマ分析」 (Fantasy Theme Analysis) という下位概念を用いて、それらがいかに共有されていくかを考察する理論である。この理論は、「ファンタジー」表現が一連の連鎖をなして、「ドラマ化」という過程を経て、人々に伝播され、「レトリカル・ビジョン」 (rhetorical vision) という価値体系を含む大きな概念となつて、象徴の「普遍化」を促す「紐帯」となる。「想像上の」言語 (imaginative language) を素材とする点が、非政治的政治性をもつ「政治漫画」の象徴性を考察するのに適切であると考えられる。

以上のような認識から、本論文では象徴的収斂理論と「ファンタジー・テーマ分析」の概要を紹介し、それらが政治漫画において適用可能かどうかを検証すべく、先行研究の検討を通じて、特に政治漫画を読むためのレトリックと象徴解読のそれとを比較しながら考察する。

## 第二章 象徴的収斂理論と政治漫画

### (1) 象徴的収斂理論とファンタジー・テーマ分析

#### 1 象徴的収斂理論 (Symbolic Convergence Theory)

象徴的収斂理論 (Symbolic Convergence Theory) は、アーネスト・ボーマン (Ernest Bormann) によれば、「(事実描写ではない) 想像のための言語 (imaginative language) を分析し一般化するのに必要な語彙」である (Bormann, et al, 1994, p. 276)。メディアからの一方向の流れを持った象徴の動きというよりは、「あらゆる組織間の全ての方向に網の目のように行き渡り、一つの修辞上の像 (rhetorical vision) を形成する」 (Benoit, et al, 2001, p. 379)。このように、小集団力学を考察していたボーマンは、上述した「修辞上の像」の形成が、集団成員のコミュニケーション活動、とくに集団の凝集性

と集団意識の共有を促進させる諸活動を促すことを見いだした。

象徴が情動、動機、意味を共有し、社会的に共有された語りやイメージを構成することによって、集団の構成員に共通の意識を生じさせ、一体感を培養する。こうした象徴の説明は、人文・社会科学全般にわたる象徴研究の共通了解のひとつといえるものであり、ボーマンのオリジナルではないことはいうまでもない。たとえば、言語学者のサピア (E. Sapir) は象徴を「凝集象徴」(condensation symbol) と「参照象徴」(referential symbol) という概念を用いて整理している。また、哲学者のカッシーラー (E. Cassirer) や、ランガー (S. Langer) は、象徴を操る存在としての人間に着目した。コミュニケーショ<sup>1</sup>ンにおける象徴の共有については、最近では池田謙一が「共有を通じたコミュニケーション」として「リアリティ形成の相」をあげて、経験、感情、知識、意見をコミュニケーションの「パートナー」と分かち合うことをあげている (池田、二〇〇〇)<sup>2</sup>。ここでは、ボーマンの見解をこうした象徴に関する多種多様な諸理論・諸研究の流れを踏まえているものとして位置づけるだけにとどめておきたい。

では、なぜこの象徴的収斂理論が登場してきたのか。

一九七〇年代にボーマンは、小集団研究に関する研究において、修辞理論とコミュニケーション論の接合を試みていた。そもそも、象徴的収斂理論は、ペイルズ (R. Bales) が提示した概念がもとになっている<sup>3</sup>。ペイルズは、小集団コミュニケーション研究において、集団討論の意思決定過程を、集団会議の内容分析と個々の集団の事例研究とを組み合わせる明らかにしようとした。すなわち、集団内で生ずる幻想・空想 (ファンタジー) を、個人のそれとの相関をとることによって、情報の送り手―受け手間のファンタジー形成やマス・メディアの夢形成・取引を推測しようとしていた。ここから、彼は演出されたコミュニケーションがどのようなようにして集団の成員にとっての社会的現実を構成するかを考察対象とした。これは同時に、メッセージを検証することによって、集団の中の文化、動機づけ、情動の様式、凝集力についての考察に道を開くことを目的としたものであった (Bale, 1970)。ペイルズのこのような視点をもとにして、ボーマンは小集団研究における修辞技法の導入から、

より一般的・普遍的な(マス)コミュニケーション理論の構築を目標にした、考察への展開を試みる。それは、集団規模をより大きな社会構造に、メディア体系を対人・集団からマス・メディアに拡張しても妥当性を失わない理論の構築を目標とするものであった(Bormann, et al, 1994)。たとえば、ボーマンは想像的言語の共有についての経験的研究をレビューするとき、非合理的なるものの合理性について、修辞技法・修辞学の必要性を説きつつ、一九七〇年代以降の諸研究を紹介している(Bormann, et al, 1994, pp. 263-4)。これらが象徴的収斂理論の背景として存在していると見ることができ。

## 2 象徴的収斂理論の構造

集団意識の共有・展開を生じさせるものになる、繰り返されるコミュニケーション様式・パターンの発見を通じて、それらを調整し、動的な過程(意識の発生・発展・変容)とそれらが受け手、メッセージ、および情報環境全体に与える影響(意味付け、動機、コミュニケーションの機能)を考察するのが象徴的収斂理論である。集合意識の形成共有を目的とした象徴的収斂理論は、共有を具体的に体现する要素のひとつである「ファンタジー」(fantasy)(想像・空想・幻想)を分析の鍵概念とする「ファンタジー・テーマ分析」(Fantasy Theme Analysis)からなる( Bormann, 1972, Cragan & Shields, 1995)。象徴的収斂理論は、ファンタジー・テーマの連鎖から起こる。クレীগンたちは、人々の間に象徴の共有がファンタジーの共有を通じて行われ、結果として集団の共有知覚を形成すると述べている(Cragan & Shields, 1995)。ボーマンは、こうしたファンタジーの連鎖があらゆる形の言説(discourse)から生ずるとしている(Bormann, 1972)。この分析は、「意味・意図・顕在(潜在)的な目標はメッセージの内容に表われている」(Bormann, 1972)、「現実象徴によって創られる」(Cragan & Shields, 1995)という「メディアの現実構成論」や「現象学」および象徴的相互作用論の流れを汲んでいる指摘に基づいている。したがって、われわれが現実を認識するときに、他者とのコミュニケーション活動(象徴がやりとりされ、ファンタジー・テーマが内在している)を介して行われ、それによって形成された知覚・認識が世の中を秩序付

け、出来事を意味付け理解し、予見が可能になる、という指摘が導かれる。

集団の凝集力や共通意識の形成にききかけて、当該集団にとって独特のもので、かつ形式ばらない性質・機能をもつ共通の視点は、「ドラマ化」にあるとポーマンはいう。会話が「ノッてくる」と、互いに興奮し身振り手ぶりを交えたやり取りが交わされる。このようなときに交わされる言葉やしぐさを「ドラマ化状態の」言説<sup>⑤</sup>とみなし、集団の凝集性・意識形成に役立つと指摘する (Bormann, 1972)。

このような、言説によって「想像力の鎖がきらめく、ドラマ化されたメッセージ内容」 (Bormann, 1972) (ファンタジー・テーマ) が形成される。ここにおいての「ファンタジー」とは「いま・ここ」での個人や集団の行動とは切り離された状況で生じるものであり、過去の集積と未来への期待とが渾然一体化したものととしてとらえられる。想像・創造上の共有された出来事解釈により、心理的・修辭的な要求を充足させるはたらきをもつ。コミュニケーションにおける「コード」、スローガン、語句、非言語サイン (身振り、顔の表情など) のような象徴的な手掛かりは、こうした「ファンタジー・テーマ」の「縮刷版」である。さらに、これらは、集団によって異なることが多く、一種の「符牒」となつて集団の結束強化に作用する<sup>⑥</sup>。

上記の「ファンタジー・テーマ」が関連するもの同士いくつか集まったものを「ファンタジー・タイプ」とよぶ。「より具体的なファンタジー・テーマがいくつかにまたがったシナリオ全体」 (Bormann, 1972) であり、「政治的、文化的を問わず」神話」がその例である。繰り返しを含んだ表現形式をもち、特定の集団に特定の意味付けや価値体系を提示し、内面化を希求する「政治神話」を想起すればよい。

より高次のレベルとして、ポーマンは「レトリカル・ビジョン」という概念を紹介している。これは、「収集のテーマやタイプが組み合わさつて一つのまとまりをなしているもの。それによつて、参加者はより幅広い見解が生まれる」ものであるとしている (Bormann, 1972)。これは、出来事解釈のためのフレームをつくる意識の共有といえる。たとえば、「政治」＝「技術」のイメージ、「玄人の技」イメージは、「レトリカル・ビジョン」となつて、政治の専門性を強制し、政治的無関心の

説明変数となり、脱政治、非政治的態度を構成する枠組みとなりうる。

(2) 象徴的収斂理論と政治漫画——説得機能と象徴的収斂理論のレトリック——

情報の受け手の態度を変容させる「説得」機能という点において、政治漫画は描き手の意図を伝えるために、読み手の解釈を一定方向に導いていくことから、「説得」機能をもっていることとみることができるといえる。集団の共通意識の形成をはかる象徴的収斂理論は、共通のファンタジー形成のためにレトリックを用いることによって、集団成員の意識を一方に導く点に政治漫画と同様、「説得」の機能をもつ。<sup>7)</sup> ボーマンたちは、レトリック研究を概観した後、従来の研究では、受け手の役割を軽視してきたと述べる（Bormann, 1982, Cragan & Shields, 1981, 1992）。彼らは、古典的なレトリック（新アリストテレス主義）でコミュニケーションの要素の一つにすぎなかった受け手の役割の理由を、メッセージの長期効果幻想と受け手の効果測定 of 複雑さ・弁別 of 難しさに求めている。ケネス・バークの動機研究において「五つ組」の「受け手」の「場面」への優位の指摘が見られる程度で、七〇年代にはいるまで（すなわち象徴的収斂理論の登場まで）レトリック研究における受け手軽視の傾向は続いたとしている。<sup>8)</sup>

象徴的収斂理論におけるレトリックと説得の関連は以下のように説明することができる。

ボーマンによれば、この理論は三つの段階から構成される。すなわち、①反復されるコミュニケーション様式やパターンを発見し、整理する段階、②集団意識の発生・維持・衰退・消失を説明する動的過程および、その影響を記述する段階、③集団の心理的・修辭的欲求を充足させる、出来事の架空かつ想像上の共有された解釈である、「ファンタジー」を共有する理由となる要素からなる段階、に分けられる。この第三の段階に至るまでに特定のファンタジーが集団内で採用され、共有される。その過程で、集団の関心や個々人の心理過程、ファンタジーを生み出すレトリック上の技術、ファンタジー形成における個人と集団の関係が重視される。ファンタジー共有のとき、ある種の「ドラマ化」に沿った「先有傾向」や「選好」ができる。つま

り人は、個人がもつファンタジーとは違ったものを共有しようとしたり、個人的なファンタジーと調和したファンタジーを求めようとするのである。

小集団の結合と共同意識の形成が「脚色(ドラマ化)された」表現(ファンタジー・テーマ)にその端緒があるならば、こうした「脚色化」をするメディアの存在は、共同体感覚の規模の拡張に大きく関与する。ことにマス・メディアが多用するファンタジー・テーマに関する象徴表現が「脚色化」の典型となる。たとえば、時系列の経験に一定の「論理」(メディア・フレーム)をもって説明されるファンタジーを提示すれば、メディアによる単純化された社会的現実が「本当の現実」として視聴者(読者)に構築されファンタジー・テーマが共有される。このように編集・歪曲・秩序づけ・解釈を介したファンタジー・テーマは、様々なレトリックを用いて、様々な意味を送り手のみならず受け手が享受することができる。先にあげた、象徴的収斂過程(ファンタジー・テーマ、ファンタジー・タイプ、レトリカル・ビジョン)によって形成される共有意識には、個々の象徴が重層的に構成されている。その形成にはコミュニケーションが重要な役割を果たす。というのは、それによって新しいメンバーには共有すべき象徴(ファンタジー)を意識覚醒させることによって伝えることができ、従来のメンバーには共有されたファンタジーを維持・発展させていくことができるからである。

ファンタジーはまた、説得による集団幻想(ファンタジー)を生み出す。ファンタジーの空想性、非実在性はそれ自体一種の情動を喚起させる。集団参加者に行動を促し、目的達成までの努力を掻き立てるには、ファンタジーの幻想性をより「リアル」に(ありそうなこととして)受け手に認識させる必要がある。そのために、象徴が情動を喚起させる必要があり、加えてレトリックが求められることになる。たとえば、ステレオタイプであっても、ドラマ化された状況の中では活性化され、適用される。マス・メディアはそれらを一度に直接無媒介に大多数の受け手に実施することができる。

レトリカル・ビジョンでは、様々なスク립トの統合が行われ、出来事全体の視点を提供する。ここには「ドラマ化」が行われ、その結果生じたメッセージの共有から統合が生ずる。共有される段階で既に選抜がなされるだけでなく、多数のファン



タジーを共有することから意識が醸成されるときにも、そのファンタジーを選択する。たとえば、二〇〇一年九月一日の事件が、「同時多発テロ事件」、事件の場所が「グランド・ゼロ」というキーワードやスローガンとして理解されると、事件後の幾多のイベント（オリンピックなどの国際的なイベントも含めて）報道によって「レトリカル・ビジョン」が形成され、元来広島・長崎の爆心地をさすという意味合いがそこから「漏れて」しまう。さらに問題は、ニューヨークや合衆国においてのみこのような「統合」にもとづく「選択」が行われるだけでなく、こうした「選択」がメディアを通じてほぼ全世界のメディアの受け手に、直接無媒介に「解釈」を強要する可能性が高くなることである。<sup>9)</sup>

### (3) 政治漫画と象徴的収斂理論——研究例考察——

#### 1 選挙運動期間の政治漫画分析

一九七六年のアメリカ大統領選挙の運動期間中に掲載された政治漫画を分析し、様々なタイプの有権者の間に、複雑なパターンをもつ「ファンタジー」が共有されていることと、この期間中に様々な集団が「ドラマ化」した「ファンタジー」との関係論じたのが、ボーマンたちの研究である（Borman, et al, 1978）。

メディアと政治の研究において、政治キャンペーンへのメディアの演出のしかたが、有権者の政治過程、候補者、キャンペーンそのものに影響することは前提となつているとする。すなわち、メディアが選挙キャンペーンをどう描くかが有権者の選挙認識を左右するという理解に立っている。こうした認識をもとに、彼らは政治コミュニケーション研究のレトリック研究と行動主義的モデルとの組み合わせた考察を行っている。政治コミュニケーションのレトリックの説得モデルとして、ファンタジー・テーマ分析を使い、政治漫画に重要なドラマ化された事柄（ファンタジー）がどのように描かれているかを記述し、それを計量的方法によって実証化しようとしている。小集団において論証されていた「ドラマ化」されたメッセージへの反応を援用して、メディアによる選挙キャンペーン報道が提示するファンタジー・テーマへの有権者の反応を検討している。ファン

タジー・テーマ分析の適用範囲をマス・オーディエンスに拡張すべく、ボーマンたちは、政治漫画の大衆説得機能に着目する。この機能を、小集団における「内輪ジョーク」(inside joke)と類似させる。このジョークは、顕著な共有されたファンタジーの指標として小集団では用いられていたからである。集団の凝集と共同意識の形成に、寄与するファンタジーの典型として「ジョーク」をとりあげたのである。「ドラマ化」された状況において、ある要素(ファンタジー)に一見謎めいた傍から見たら何のことかわからない「ホノメカシ」をする(言語化、外化する)と、当該集団の他の成員から大きな反応を得られる。こうしたジョークをやりとりすることにより、当該集団の成員として認められる。つまり、そのジョークを了解できることが集団の成員資格であり、そのジョークを笑うことによつて共通の意識が形成される。政治漫画を見て「ニヤリとする」反応がまさにこのような小集団におけるファンタジー・ビジョンの形成に対応するとボーマンはみなしているのである。政治漫画を見て(読んで)特定の技法に笑うことだけでなく、漫画の背景にある凝集された様々な「主題」(ハリソンの言う)が眼前に現れることによつて読者は、「笑う」のであり、この点をボーマンたちは指摘している。<sup>11)</sup>

この研究の分析概念は「集団ファンタジー」である。創造・想像性に富む出来事の解釈であり、心理的・レトリック上の欲求を満たすものである。ここでは、選挙候補者の生身の人間らしさや歴史上の人物になぞらえた叙述が対応する。また、ファンタジー形成の際の「演出」についても、送り手(候補者側ないしメディア組織側)のみならず、受け手である有権者が、「ドラマ化」に適合して作成に協力することによつて進行する。ここに上述した、「内輪ジョーク」との接点を見ている。ドラマ化された人物の描写に笑いを誘うものがあつたとしても、その笑いは、送り手に対して笑うのではなく、送り手に「合わせて」笑うものとされている。この中に、送り手からの自発的服従を誘う技術を読み取るか、あるいは送り手―受け手の「健全な」相互作用的コミュニケーションを読み取るかは異論のわかれるところであろう。しかし、小規模集団のコミュニケーションの敷衍を目的の一つとして設定しているボーマンたちの意向は、送り手主導でないレトリックであり、象徴の収斂に伴う集団意識および集団的な感情の共有の考察であつたと見るほうがよい。

マス・メディアの伝える出来事が受け手である大衆にとって共通のファンタジーを形成する心理過程を、ボーマンたちはこの論文で明らかにしようとした。選挙運動期間のメッセージは、①候補者陣営がおくるもの、②メディアによるコントロールされた情報、③大衆一般が自発的に行った出来事の三者が渾然一体化している。<sup>12</sup> ここで彼らは便法として、以下のように上記の三種類の情報を整理している。①の情報（候補者陣営）は、各陣営内の小集団で煮詰められて、「レトリカル・ビジョン」（当該集団の行動を決める雰囲気まで）としてスローガンやキャンペーン・メッセージにまで純化されている。②の情報は、ジャーナリストが①を素材にして取材・検討を行いニュースとして発信するものである。こうした①ないし②の情報を受け手は「ファンタジー」として共有する。そのとき、この「ファンタジー・テーマ」を自らが属する小集団で話題にし活性化させる。これによって副次的ではあるが「ファンタジー・テーマ」「タイプ」「レトリカル・ビジョン」という、遠心的には共有範囲の拡張、求心的には、知覚・認知から態度形成を通じて価値規範のレベルにまで浸透する過程が作られる、としている。

方法的には、小集団ジョークを的確に反映するものとしてボーマンは政治漫画をとりあげる。言外に演出意図を含んでいる行動主体の描写、描写全体がなぞめていることから政治漫画を素材としたと述べている。これは、顕在的な表象では政治漫画の意図が十分汲み取れないこと（言外に多くの意味構造をもっていること）が、「内輪ジョーク」を発生させる可能性が大きく、かつ選挙と候補者の描写を「戯画化」という形で「ドラマ化」させ、象徴の凝集性と感情喚起性をともに発揮させることが可能であるという点に基づいていると考えられる。具体的には、一九七六年の大統領選挙期間中（投票日二週間前までの主要新聞・雑誌から抽出（二五〇枚）し、あらかじめ内容分析によって抽出していたファンタジー・テーマに応じてそれらを分類した。それに基づき、被験者にそれらに対する反応を調査した。その結果、一四のファンタジー・テーマが共有され、カーター、フォード両候補の「負け比べ」の様相が政治漫画から反映された。その他Q技法などを用いて数量的分析を行った。<sup>13</sup>あくまで、この研究は小集団研究で行われていた「ファンタジー・テーマ分析」をマス・メディアないし政治コミュニケーション研究に試験的に当てはめたという性格が強く、仮説提示の印象は否定できない。たとえば、政治漫画それ自体をマス・

メディアの純粋な意図の体現とすることに疑問がある。ハリソンも指摘したように、政治漫画は、漫画家と編集者（新聞社における）および新聞社全体の「合作」である。そうであるならば、そこから「ファンタジー・テーマ」を抽出したときのそのメッセージは誰に帰属するのであるかという疑問が残る。また、選挙運動期間中のメッセージの分類において、候補者陣営の提起する「ファンタジー」が直接無媒介に受け手に到達することはありえない。候補者陣営が提示したメッセージをメディアが媒介したとき、そこにメディアがその「ファンタジー」に参入する可能性がある。そうした状況を「ファンタジーの共有」と呼ぶことができるのかという問題がある。すなわち、メディアがもっている「レトリカル・ビジョン」にもとづく「ファンタジー・テーマ」と候補者陣営が提起するそれが競合して新たな共有された「ファンタジー・テーマ（タイプ）」が形成されるときも、その程度はどのようなものになるのか、メディア優位になるのか、候補者陣営（情報源）優位になるのか、あるいはお互いに相殺（倍加）されるのか、こうした「動的過程」がこの研究からは見えてこない。

## 2 「大統領の醜聞」における政治漫画分析

いわゆる「クリントン・ルインスキー問題」に関する、大統領への査察、弾劾、裁判に関する政治漫画について象徴的取扱い論を使つて分析したのが、ベノイトたちの研究である（Benoit, et al. 2001）。「レトリカル・ビジョン」の多様性は、そのビジョンの複雑さに左右される。比喩や暗示を文字や画像をつかつて高度にかつ批判的にメッセージが表現される。その結果、読み手は多種多様な解釈ができるとともに、この事件（ドラマ）の「ファンタジー・テーマ」に容易に近づくことができる。そして、そうしたメッセージ内容には、重要な争点が含まれており、登場する有名人（クリントン大統領、モニカ・ルインスキー、国会議員、ニュースメディア組織の人々など）に対する道義的判断の基準となつていと述べている。D・カーゲルによる膨大な政治漫画のインターネット・サイト（Daryl Cagle's Professional Cartoonist Index, Cagle, 1998）から二〇〇〇枚にもわたる政治漫画を抽出して、そこに描き手のビジョンと登場人物のそれとの調和がなされていることを始めとして

様々な知見が紹介されている。

ペノイトたちは、政治漫画の過去の研究を視覚コミュニケーション研究、政治漫画の性質研究、レトリック機能研究、の三つに分けて整理し、視覚要素に依拠した説得メッセージが政治漫画の特質であると規定する。そこにおいて、主要な政治イベントのもつ「レトリカル・ビジョン」——争点・出来事をより幅広い視点で表現する「ドラマ化」された言説の統合体で、認識・価値の判断基準ともなりうる——を辿る手段として政治漫画を位置づけることを提言する。

こうした先行研究の理解と自らの「政治漫画」の研究視点の位置づけを終えた後、ペノイトらは、象徴的収斂理論が政治漫画のレトリックを考察するのに如何に効果的かを語っていく。まず、事実に基づく表象とは異なる「想像上の出来事・人物を表現するための言語」(imaginative language)を分析するための「語彙」がファンタジー・テーマ分析であるというポーマンの指摘を引用して、分析概念であるファンタジー・テーマ分析の説明を象徴的収斂理論そのものの説明に先んじて行っている。政治漫画研究の概要と、この象徴的収斂理論への接近からわかるように、彼らにとつて政治漫画は象徴であるという認識よりも、象徴的機能をもつという認識が重要であり、そのための分析枠の模索であつたとみられる。したがって、象徴的収斂理論の属性である、集団の凝集力や、集団意識の共有は結果として生じたものであり、ここでの彼らの関心事としては副次的な役割を与えられているにすぎない。

いいかえれば、あくまでメディアとしての政治漫画の機能に重点を置いた研究になっているともいえる。政治漫画をみることの意味、読むことができることの意味、そうした意味は認識の上で政治漫画を触媒にして、送り手と受け手が「共通の」ファンタジーをもつたことにほかならない。

政治漫画に内在する、政治的レトリックを考察するための手段としてファンタジー・テーマ分析を用いようとしたペノイトたちは、政治漫画を見ることによって共有される意識を生み出すものとしてポーマンがファンタジーを説明する際に使った「ドラマ化」という概念を導入する。ジョークや言葉遊び、ギャグなどから漫画のもつ「ユーモア、ウィット」を類推するだ

けでなく、戯画化表現に関連付けている。この戯画化という表現は研究では実際には使用されてはいない。しかしながら、小集団から大衆への「ドラマ化」効果の拡張がマス・メディアを介して行われることの中に、新聞漫画の新聞という存在をあらためて確認していることや、レトリカル・ビジョンの構成要素に「劇の登場人物」(*dramatis personae*)をまず指摘し、メッセージに描かれている人物で当該ビジョンを活性化するもの、というポーマンの言説を引用していることから窺い知ることができる。そして、政治漫画へのこうしたファンタジー分析の適用は、レトリカル・ビジョンの基本要素としてクレীগンとシールドがあげた、「登場人物」「劇の筋書き」「場面」「(ビジョンを正当化する)装置」をそれぞれ「政治漫画の登場人物」「筋書き」「場面」に対応させて、そこで用いられる具体的なレトリックの技法について検討しているところにより顕著になる。政治漫画において描かれる人物が誰であり、どのような性格として描写(戯画化)され(あるいはどんな事物の擬人化——小泉首相ならばライオンが擬人化されたものが表象するように——がされるか)(「登場人物」、出来事の流れのどこに人物(主人公)が位置しており、どのような思惑・意図で行為に及んでおり(「筋書き」、それはどこにおいて、いつなされているか(「場面」を明らかにするといったことにつながるのである。このような政治漫画の読み方の中で、人物が最も重要であることは政治漫画の歴史——時の権力者(集団でなく)を描いたことに始まる——をみればあきらかではある。

ベノイトたち(四名)が政治漫画を分析した方法は以下のとおりである。

上述したカークルのウェブ・サイトから、クリントン・ルインスキー・スターに関する調査と弾劾手続きをテーマとする政治漫画を二〇〇枚位以上抽出した。そこから、「ファンタジー・テーマ分析」で検証可能な、繰り返し登場する当該項目の特徴を政治漫画一枚ごとに取り出した。この作業は観察者が個別に行い、その結果を持ち寄ってレトリカル・ビジョンとその要素を合意にいたるまで検討した。

その結果、政治漫画が反映するビジョンは、クリントン大統領とスター検察官のビジョンの複合であった。彼らの競合・対立関係を「公人同士が派手な茶番劇を演じている」(Benoit et al, 2001, p.383)というレトリカル・ビジョンでまとめ、いわ

ば「高見の見物」していたのが政治漫画であつたといえる。レトリカル・ビジョンを活性化させる要素を、「登場人物」「物語の筋書き」「動機」「価値」「シナリオ」「主要な類推」「暗喩されたもの」と分けて分析した結果は、いずれも各要素にとつて批判的な姿勢であつた。ここから政治漫画の風刺性を見ることが出来る。たとえば、「主要な人物」は全て道化（共和党委員会）と悪漢と不心得者（クリントン、スター）であり、英雄は登場しない。ここにメディアが風刺の対象になっていることに注目したい。普通、日本の政治漫画の場合掲載メディアとの兼ね合いからか、他のメディアを風刺する作品はめったに見られない。<sup>15</sup> それに対してこの場合の政治漫画には、メディア自体を「人の不幸を喜ぶのぞき人。私生活を詮索するのにかまけて、本当に大切な諸問題に目が行き届かない」（Benoit et al, 2001, p383）というレトリカル・ビジョンの下位ビジョンにもとづいて描写しているように、徹底した風刺を平等に投げかけている。<sup>16</sup>

では、こうした全ての登場人物への否定的姿勢は、風刺性のみで説明しうるものであろうか。風刺性を生じさせるものはどのような価値であつたか。この研究でベノイトたちは、レトリカル・ビジョンの構成要素として「（ビジョンを貫く）類似性」（major analogue）として、道義性、社会性、実践性をあげている。そのうち、登場人物に影響を与えているのは、公人、私人（民間人）、ニュース・メディア、大衆のそれぞれがどのように振舞うべきかといった道義心と適切な判断であつた。これがもたなくて登場人物へ否定的な評価につながつたとしている。いわば、この「類似性、類推性」は描き手のみならず、読者一般をも規定する価値意識である。ここにおいて、風刺が風刺足りうるには「内輪ジョーク」であろうとも、コミュニケーションが成立していなければならない。すなわち共有されたファンタジーが相互に所有される必要がある。

結論と展望として、ベノイトたちは、読み手へのレトリック効果を考察する必要性を説いている。これは、レトリカル・ビジョンが情報の送り手のみならず、受け手（読み手）をも含んだ象徴の「共有」であることを、風刺の成立要件から確認した。したがってこの風刺性と「類似性」の考察を進めることが求められる。

また、視覚メタファの利用という点も過大として彼らは提示している。公共の出来事に関する重要な象徴的なメッセージ

が、視覚情報として（文字情報に翻訳されずに）難度も登場してきたとベノイトたちは述べる。たしかにこのことは、政治漫画の通文化性を考察するときや、レトリック批評の拡大の問題とも関わってくる。さらに、ひいては象徴そのものが持つ個別性と普遍性（独自の意味解釈を持つと同時にコミュニケーションの手段ともなりうる）の問題を扱うときにも重要であろう。

### 第三章 結論と課題

象徴理論が抱える問題として、象徴の個別性をどのように一般化するかがある。この個別性を実証すべく、記述と数量を用いて行う手掛かりに象徴的収斂理論を求めた。この理論が政治漫画においても説明可能かどうかを試みたこともこの論述の目的であった。ポーマンが七〇年代に小集団研究から見いだした象徴的収斂理論は、集団の共有意識形成を事実でない想像的な言説の活性化を通じて行うものであった。この研究は、ファンタジーが、テーマから、集合表象としてのタイプを形成し、小集団の規模を超えて拡大し、組織・地域・国家の言説及びそれを支える信念体系を構成するレトリカル・ビジョンに至る構造をもっている。

この研究を七〇年代以降の周縁の諸研究領域に即して説明すれば、マス・メディアの現実定義作用（現実の再構成論）、象徴的相互作用論などのコミュニケーション論、情報の受け手の能動性論にそれぞれ対応できる点がある。たとえば、個々のファンタジーが「ドラマ化」によって活性化される過程で、現実認識の枠組みを原因ないし結果として位置づける「現実定義」がされる。象徴を用いた情報の交換から、送り手・受け手相互にファンタジーとして共有させるという点で象徴的収斂理論は、相互作用論としても関連をもつ。さらに、当該理論の分析概念である「ファンタジー・テーマ分析」において、レトリックによるファンタジーの「ドラマ化」は、特に「内輪の笑い」を代表例として機能する。こうした点から、レトリックが送り手のみの技術という視点を離れ、受け手との相互の結果、ひいては受け手の自発的な意思がレトリックの良し悪しを決めるとなれば、能動的受け手論の知見とも重なる点が見出せるのである。



政治漫画研究において、象徴的收斂理論は政治漫画が視覚要素に依存した説得メッセージという位置から説得の根拠にレトリックとファンタジーの共有があることから、その効用が可能性として見出されいくつかの実証研究も散見された。従来の研究動向が「始めに説得機能ありき」といった姿勢で整理されていたのは若干疑問の残るところではあったが、政治漫画がどのようなテーマで構成されているかを、Q技法などの量的分析を使って行動科学的に裏付けようとする試みの中に、説得のためのレトリック——たとえばメドハストとテソーサの研究が指摘する「創案」ないし「意向」の妥当性——が示唆された。また、政治漫画自体の認識コードの問題として、「レトリカル・ビジョン」の提示は、当該メディアの送り手（漫画家や編集者の集団）の認識フレームだけでなく、受け手である読者のフレーム形成を意識したものであり今後の検討をする個所であろうと考えられる。

このように、「ファンタジー・テーマ分析」を分析枠組みとする象徴的收斂理論はいくつかの展開が期待できるが、そのためには課題も見いだすことができた。以下は象徴的收斂理論の批判を通じた本考察のもつ今後の課題である。

まず、Q技法における計量化の可能性とその限界を明らかにする必要がある。ファンタジー・テーマの抽出において、ボーマンたちの研究では小集団研究の拡張として計量分析が導入されていた。これに対してベノイトたちの分析ではQ技法は用いられず、観察者の主観によるものになっていた。こうした方法論の差異は、Q技法の適用の明確さがはつきりしていないことによるものであろう。自由回答に因子分析を用いて欲求および充足を類型化したカッツたちの利用と満足研究の試みを類推適用できるのではないかとみられる。

第二に、パーソナルからマスへのコミュニケーション規模の拡大によって漏れるものないし加わるものは何かという点を明らかにできないであろうかということがある。たとえば、現実構成論との接点を求めるにしても、送り手、メディア、受け手のそれぞれが現実（ファンタジー）を構成するならば、それらの相互の影響力の違い、そこに生ずる権力（影響力）の違い、あるいは、共有された「ファンタジー」はだれの現実なのかといった問題、またそもそも相した疑問が妥当か否かということ、

などについても考察する余地がある。

第三に、先の課題に関連して、たとえば新聞の政治漫画であれば、記事・論説といった活字との関係、写真・図表という他の視覚情報との関係、紙面配置の中での「ファンタジー・テーマ」の役割(記事が必ずしも事実報道をしているとは限らない)、というような「統合体としての新聞メディアにおける政治漫画」の役割を、こうした分析はどのように「コンテキスト」として読み込むことができるのだろうか。送りの現実構成をする要素はこのように政治漫画だけではなく多様に存在する。それらは独立した関係にあるだけではないとすればどのように整理していくべきであろうかという問題がある。

第四に、「ファンタジー・テーマ分析」はそもそも画像分析なのかどうかという点がある。文字情報と画像情報との区別が十分ではない。分析を同じにする理由としてレトリックをあげるとすれば、メドハストたちの整理のほうが一日の長がある。かれらは、画像情報に演説レトリックを修正して政治漫画の分析枠組みとして特化させた。画像を理解するとはどのようなことをマス・コミュニケーション研究においても研究が登場しつつある。<sup>1)</sup>こうした知見を検討し、象徴的収斂理論に取り入れていく必要がある。

最後に、冒頭(第一章)に示した政治学への援用の可能性を課題としてあげておく。政治学の象徴研究は価値体系・イデオロギーを暴露し神話解体作用を持つとした大嶽の指摘は意味がある。だからといって、観察者自体の価値を相対化してしまうという自縄自縛に陥ることにはならないと考える。それは、みずからの価値を明示して象徴分析を象徴の個別性を強調して行うことに問題があったのであり(自分は自分、他者はそう見えないという批判に対抗できない)、象徴的収斂理論が副次的に連れてきた「笑い」の問題を導入することによって「自縄自縛」の罠から抜け出せるのではないかと思われるからである。情緒を喚起させる象徴の働きによって引き出された「笑い」を、自己を対象化するための方略として位置づけ、「ドラマ化」の要素としてのユーモア、ジョークによる「ファンタジー」の共有の検討をする必要がある。自由主義的立場の多様化によって、自由主義そのものが見えにくくなっている現代において、「理念シニシズム」や「価値ニヒリズム」にあえて陥ることで自ら

を対象化するのである。そうした役割を政治漫画に求めて象徴研究の「自縄自縛」を克服することが求められる。それによって、「ファンタジー」の分析は「非政治的政治性」の考察への道を開くことになる。個々から得られた知見を「事実に基づく」とされる、「真面目な」世界の「政治性」の考察（従来の政治学の対象ではあるが）に援用することができるであろう。政治漫画の内容分析に「笑い」の分析を入れることが急務とされるゆえんはここにある。

## 註

### 第一章

（1）本稿では、「シンボル」と「象徴」を同義とみなす。ただし語句の統一をはかるため、可能な限りにおいて「象徴」という語を用いる。

（2）この考え方を推し進めると、行動科学における数量化、計量化も象徴形式をできる限り客観的に読み取ろうとする試みとみなせるかもしれない。しかし、本稿では象徴の機能、関係性を論理を使って記述する方法を象徴研究とみなす。

### 第二章

（1）ボーマンも、カッシーラーとランガーを引用している。（Bormann, 1972）

（2）加えて、コミュニケーションの記号論的接近では、記号、信号、象徴の区別に始まり、コード、テキスト、コンテキストにおける役割と象徴（記号）の作用の中に、象徴における情報の共有が前提とされている。

（3）象徴的収斂理論の起源、性質、効用、応用例について建設的な議論がはじめられたのは、一九七〇年の、ミネソタ大学の月例小集団研究会においてであるとされている（Bormann et al, 1994, p. 260）。コミュニケーションにおける、事実描写の言語から想像上の、空想的な言語のもつ社会的な機能に着目したところに、象徴的収斂理論を見いだしたのである。ちなみに、この研究会のメンバーは、以後五年間にわたって論文や調査研究の報告、検討を行い数多くの論文を輩出した。

（4）以下、「fantasy」の訳については、「ファンタジー」とカタカナ表記とする。その理由は、事実・客観描写を目的とした表象に對して、主観的・想像的・空想的な想像上の事物、事象を対象とする表現一般をさしているため、適切な日本語を措定できなかったからである。

- (5) しやれ、言葉遊び、ことばの「あや」、寓話、逸話、「お話」、たとえば話、ジョーク、ギャグ、冗談、ウィット、「キツイ」言葉などが「ドラマ化」の要素として挙げられる (Benoit, 2001)。
- (6) 象徴の個性性が強調されたものとみることができよう。「わかるひと」と「わからぬひと」の峻別がそれによって可能になるから、集団の結束と他者の排除を同時に行ないうる。
- (7) 象徴それ自体が、内容の凝集や感情の喚起の中に、コミュニケーションの受け手に対して、態度変容を要求することが前提とされているともいえる。
- (8) 一九七〇年代の、ボーマンたちを中心にした、ミネアポリス・セミナーのグループにおいて、ファンタジー・テーマによる受け手の復権がなされた、としている。「レトリカル・ビジョン」にみられるような、修辞上の共同体や意識が象徴的収斂理論によって見いだされたと述べている。
- (9) レトリックに関して注意することは、これを強調するあまり、この場合メディアそれ自体のもつ影響力が見えなくなってしまう(第二次元的権力) 危険があるということである。たしかにボーマンたちは、象徴的収斂理論を受け手・メディア・メッセージの視点に着目したものであるという認識を述べてはいる。が、そうであるならば、送り手―受け手の相互作用から生ずるレトリックおよびその機能という視点を明確にしなければならぬであろう。
- (10) 柳田國男の「山の神とヲコゼ」や、「笑い袋」の効果想起すれば十分であろう。
- (11) この「内輪笑い」において「レトリカル・ビジョン」を読み取ることは、政治漫画の「大衆化」を見直すことにつながる。政治漫画の「衰退」というH・スミスやストライヒャーが提起した問題に「漫画」の側面(笑いの側面)から接近することになろう。また、笑いそのものが分極化してきた現代において、「批判としての笑い」と「笑い」の「大衆化」を考える契機ともなるであろう。
- (12) たとえば、世論調査の場合、その企画主体によって(選挙推進団体、新聞社、テレビ局、各民間調査機関、候補陣営)、母集団、回答者の選定が必ずしも一様ではない。候補者による世論調査は、日本ではまだなされていないが、当該候補を支持すると思われる層を回答者群にして回答を行わせるものである。また、メディアによるものにはライニーのいう「構造的バイアス」が無自覚に混在する可能性がある。世論調査結果がどのメディアでどのようなコンテキスト(紙面、番組、掲載・発表時期)でどのように語られた(結果の解釈)を慎重に行う必要がある。

(13) Q技法・因子分析などの、「ファンタジー・テーマ分析」における計量的な側面については、次回の課題としたい。「第三章 結論と課題」参照。

(14) 数量的分析の結果如何では、こうしたファンタジー・テーマ間の関連について知見が得られる可能性はある。

(15) 日本の政治漫画は、メディアに対しても、読者・一般庶民の無誤謬性と同様、「社会の木鐸」といった道義的な役割を墨守していると考えられる。

(16) そうすると、メディア批判をした政治漫画それ自体はメディアとしてどうなのか。「高見の見物」で処理するわけにはいかない。政治漫画自体もこの事件と同時代の関わりをもつはずである。残念ながら、この政治漫画研究では、こうした自己批判にまで言及は及んでいない。

### 第三章

(1) 谷本奈穂 (谷本、二〇〇一)・是永論 (是永、二〇〇二) の研究報告などにその傾向を見ることができると。

(2) 「非政治的政治性」の考察については稿をあらためて検討したい。

### 引用・参考文献

- Bales, R. F. (1970). *Personality and interpersonal behavior*. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Benoit, W. L., Klyukowski, A. A., McHale, J. P., and Airne, D. (2001). "A fantasy theme analysis of political cartoons on the Clinton | Lewinsky-Starr affair," *Critical Studies in Media Communication*, 18(4), 377-394.
- Bormann, E. G. (1972). "Fantasy and rhetorical vision: The rhetorical criticism of social reality," *Quarterly Journal of Speech*, 58, 396-407.
- Bormann, E. G. (1982). "Fantasy and rhetorical vision: Ten years later," *Quarterly Journal of Speech*, 68, 288-305.
- Bormann, E. G., Koester, J., & Bennet, J. (1978). "Political cartoons and salient rhetorical fantasies: An empirical analysis of the 76's presidential campaign," *Communication Monographs*, 45, 317-329.
- Cagle, D. (1998). *Professional cartoons index: White House scandals*. Obtained on-line: <http://www.cagle.com/scandal/1998home.asp>.

- Cassirer, E. (1953). *An Essay on Man--An introduction to a philosophy of human culture*. New York: Doubleday Anchor Books. 宮城音弥訳 (一九五三) 『人間』 岩波書店
- Cragan, J.F., Shields, D.C. (1981) *Applied communication research: A dramatic approach*. Prospect Heights, IL: Waveland Press.
- Cragan, J.F., Shields, D.C. (1995). *Symbolic theories in applied communication research*. Bormann, Burke, and Fisher. Cresskill, NJ: Hampton.
- 池田謙一 (二〇〇〇) 『コミュニケーション 社会科学の理論とモデル5』 (東京大学出版会)
- 是永 論 (二〇〇二) 『映像における受け手の理解の実践過程——会話分析の可能性』
- 二〇〇二年度日本マス・コミュニケーション学会秋季研究発表会報告論文 日本大学文理学部
- Langer, S.K. (1948). *Philosophy in a new key*. New York: Mentor Books. 矢野萬里、池上保太、貴志謙二、近藤洋逸訳 (一九六〇) 『シンボルの哲学』 岩波書店
- 大嶽秀夫、鴨武彦、曾根泰教 (一九九六) 『政治学』 (有斐閣のシリーズ)
- 谷本奈穂 (二〇〇一) 『広告における『視覚的(ビジュアル)なもの』の考察』 二〇〇一年度日本マス・コミュニケーション学会春季研究発表会報告論文 同志社大学